終　電　車

『やわづらうてな。』と寄り添ふ夕霧の言葉が、まだ私の耳のあたりに漂って居る。　と我になく口をむんだまゝ舌の上でそのを繰返してゐる。

『やわづらうてナ。』

　しなしなとれあふ二人のが、の精のやうに美しくかしく動いてゐる。夢のやうに霞んだ舞臺の華やぎが、まだ私のを柔かくふうはりと包んでゐるのであった。

　淺草橋の伯母さんとこへ寄って、さんざ伊左衛門のめをして、電車がなくなりさうなので慌てゝ暇を告げて來た私は、須田町の乘換場から、駄目だとは思ひながらそれでもはいってみた萬世橋の停車場に思ひ掛けなく最終の電車が待って居た。

　私の住んでゐる代々木には、この方がどんなにか近いのである。

　覺め切らぬ夢のあとを追ってるやうに、ぼんやりとしてゐる私のうそ寒さにげた顔が、暗い窓硝子に侘しくうつってゐる。あちらの隅に一人、そこの中央に一人といった風に、ちらほらと場を取ってゐる人達は、或は眠りこけたり、腕組みをしてもの思ふらしくしてたりして、色のめかけた腰掛けの花模様に、りのない氣分が漂ってゐる。

　いつどこまでどう來たかわからなかった。恐ろしいほど速力を出して驅ける電車が、烈しい動揺を少しく緩めて來たのを、ぼんやりと意識する間もなく、電車はしゆっと一つのプラットホームに横づけされてゐる。

『よつや―――』

『よつや―――』と車掌が呼んでゐる。

　とそこらにつかるやうにしてどっかりとはいって來た一人の男がある。誰が降りやうと誰が乘らうと一向氣にもとめないでうっかりしてゐた私の前に、立ちはだかるやうによろよろとして『やあ！』といふ。

　私はふいと顔をあげた。

『まあ！』

　その人は倒れるやうに私の傍に腰を下して、に頭をせかけて眼をつぶった。

　私は初めてみるこの人のこういふ有様に、思はずべた微笑の中に、くやうに影のさして消えた不思議な寂しさを自ら見逃さなかった。

『どちらへ行ってらっしゃいましたの？　たいへん御元氣ぢゃありませんか。』

『えゝ、ハゝゝゝ』と厭味氣なく何やら言ったのが、電車の音に掻き消されて、私の耳にはたゞ『友達』といふ言葉だけがはっきりと殘った。再び眼を閉じて快く揺れるに委せてゐるやうなをみると、私は向き直って又しょんぼりと暗い窓硝子にひあった。

　ぽつりとが切れたやうに、華やかな幻は後遠く去ってしまって、たゞもの思はしげな、何かを考へやうとする心は、私の心を否應なしに沈めて行った。

『畑野さん　畑野さん』といふは、私に取ってることなしに快い響である。私はこの人が好きなのである。けれどもそれはどんな内容を持ってゐるんだらう？

　私はふと、二人の女が或日火鉢をんで、ての自分達の周圍であった男達の噂に興じたことを思ひ出した。それは一目に見渡したやうな二人のであった。

『………昔ねえ！』

『ほんとに考へてみると一昔ねえ！』

『畑野さんもこんど御卒業なすったんでせう？』

『えゝ、法學士！　銀時計ですって！』

『早いものねえ！』

　かう言って二人は暫くだまった。

『私あの人好きさ！』とやがて、一人は胡麻化すやうにわざといた調子で言って笑った。

『私も。』と一人は言葉短かに同意して凝乎と友達の顔を見つめた。

　二人はまた暫くって、一人が火箸で灰に字を書いて消し書いては消しゝてるのを一人は見てゐた。間もなくすると、前の一人はふと顔をあげて、何かもの言ひたさうに暫く美しい笑顔をつくってゐたが、

『だけどね、私畑野さんて人は怖い人なのよ。』

『どうして？』

『どうしてって……あの鋭さ、あの何も彼も見ぬくやうな明晰な頭……私なんだか怖いわ、あの目で凝乎と見られると身がすくむやうな氣がするのよ。』

『だってあの人は貴女にラブしてましたよ！』

『嘘ですよ！』

『いゝえ、ほんとう。』と一人は眞面目だった。

『どうして？』

『どうしてって　ほんとうだからほんとうだわ。』

『ほんとうかしら？　だけど貴女どうしてわかって？』

『私はあの人が好きだから！』

　再び二人は黙りあった。そして美しい一人は言った。

『だけど、私どうしてもほんとうと思へないわ。私は却て畑野さんは貴女にラブしてらっしゃると思ってゝよ。』

『まあ！　それこそ嘘ですよ。』

『いゝえ、ほんとうに私さう思ってたの、貴女が畑野さんと話してらっしゃるところを見ると、ほんとうによくり合って、そして面白さうなんですもの！　私脇から見てゝ、どんなにそれが羨しかったでせう！　なんだか寂しィい氣がしてならなかったわ。』

『まあ、寂しかったのは私ですわ。あの人は貴女を思ってらしったんですもの……。』

　間を置いて美しい人は嘆息するやうに言った。

『昔ねえ！』

『全くね、もう四年になるわ！』

『さうだ、そのなんとなく寂しいのがその内容の總てゞある！』と私は思った。その外には何の際立った感情もない。

　見馴れた停車場の灯がちらちら窓にはいって來ると、乘換を知らせる車掌の聲が、更けて行く夜の氣にって行く。

『もし代々木でございますよ。』と、私は氣持よさゝうに寄りかゝって眠ってゐる畑野さんに聲を掛けた。

『や、有難う！』

　そこに降りる者はたゞ二人より外になかった。私は掃き清められた段々を並んで降りた。

『あゝ馬鹿にかった。』

『随分召上れたやうですのね。』

『えゝまあ可なり………。』

『お友達は大勢でらっしゃいましたの？』

『いゝえ、なに三人ばかりです。あゝ無闇に怒鳴り放したものだから、すっかり咽喉が涸れちゃった！』

　私はそれまで、先刻耳に殘った『友達』といふ言葉から、譯もなく誰かの送別會といふことを考へてしまって、そしてわやわやと集った大勢を心にいてゐた。

『四谷からお乘りになったやうでしたのね、どちら？』

『赤坂の方でした。』

　私は不思議にないやうな氣がした。けれどそれ以上立入る勇氣はなかった。

　櫻の樹の下の交番の巡査が、靴の音と下駄の音とに振り向いて、薄暗い中から二人を見送った。

『どうです、近頃何か面白いことがありますか。』

『いゝえ、ちっとも。この頃は所帶の苦勞ばっかし。』

『ハゝゝゝそれが面白いんぢゃないんですか。獨り者はちっとあてられますな。』

『あら！　そんなことぢゃないんですよ。』

『ハゝゝゝまあそんなもんでせう。時に何は、矢澤さんはどうしました、赤ちゃんが出來たんでせう。』

『えゝ大きくなりましたよ　そりあ。』

『女のお子さんでしたね。』

『えゝ。』

『まだ一人ですか。』

『えゝ。』

『貴女はどうです？　ハゝゝゝ』

　後から後かられ目をふやうに言葉を次ぐのと、男足の早目なのに少し息を切らしながら、それはほんとの調子ぢゃない調子ぢゃないと私の心はかぶりを振った。

『もう一人位あってもいゝぢゃないんですか、寂しいでせう。』

『そりあ、どっちにしたって、二人だって三人だって私達の寂しさは同じだらうと思ひますわ、たゞ複雜になるだけのことぢゃないでせうか。』

『さうですね、寂しいですね！』

『私、寂しくっていゝと思ひますわ、寂しいのがほんとなんだと思ひますわ。』

『さうでせいかねえ、だが僕は寂しいのは厭だ、寂しいと消極的になってん！』

　冷たい夜氣に觸れて、少しづゝ醉ひがさめて行くらしい、畑野さんの足取りは思ひの外しっかりしてゐる。そのこつこつといふ靴の音が、時々暗い道の小石に當って、ひっそりと屋敷町のところどころのに、薄ぼんやりとしてゐる電燈が瞬くやうな氣を起させる。

『女は駄目ですな！』

　暫くしてから、畑野さんは何の續きともなくぽつりとかう言った。

『さあ……或は是認するより外仕様がないかも知れませんわねえ……』

　私はそれはどういふことであるのだらうと思ひ、ひながら言った。

『だけど………。』

　私の心は少し落着かなくなってゐた。もう三四軒先の荒物屋の横町を私は曲がらなければならないのである。なんだかそれが殘り惜しいやうな氣もする。けれど一歩でもそこから先に私の足が出たら……そしたらそれが、私が私の平和をする第一歩なのである。

『だが貴女はまだいゝ、家に歸りや待って呉れる人がある、僕は寂しいな、これから家に歸って、Ｓ（犬の名）をにして………。』

　私はふと立止った。私は荒物屋の角に立ってゐる。畑野さんは一向思ひ懸けなかったやうに、そのまゝの歩みを猶二三歩保った。

『ぢゃ………。』と聲をかけると、初めて氣がついたやうに一寸立止って、

『や、こゝでしたか、ぢゃ　さよなら！』

　そのまゝ元氣よくこつこつと畑野さんは歩いて行った。

　私は暗い横町にはいった。

と、ものゝ匂ひのやうに夫の懷しさが私の胸を包みに來た。優しいそのの前には、雪が朝日にあふやうにこの寂しさも消えていくのだと思ふと、すらりとした背廣の後姿に私の心は餘計さびしかった。

　どっかの時計が長く長くれた十二時を打った。

底本：「水野仙子全集」第三巻

初出：「處女」大正三年一月

テキスト入力：小林　徹

公開：平成二十九年六月二十日

リンク：[水野仙子ホームページ](http://carlschuricht.com/Senko/senko.htm)